

神戸大学国際文化学研究科 日本語教師養成サブコース

2026年3月17日

神戸大学大学院国際文化学研究科「日本語教師養成サブコース」自己点検報告書

1. はじめに

登録日本語教員養成機関ならびに登録実践研修機関として、カリキュラム及び教育体制の不断の点検と改善を行うため、サブコース内規第14条に基づき、自己点検報告を行う。

2. 自己点検の時期と期間

サブコース内規第14条に基づき、2025年度事業について年度末評価を行う。なお、2025年度のコース在籍生のうち、M2は旧制度（経過措置）の学生であり、M1は登録日本語教員養成機関・登録実践研修機関として受け入れた一期生となる。

3. アンケートの対象者

- ・M2受講生（旧制度）3名
- ・M1受講生（新制度）4名
- ・新制度下での科目提供教員 10名
- ・コース学生の指導教員（上記との重複者を含む）6名
- ・合計 23名

※いずれも回答は任意。回答は記名式。

4. 2025年度受講生アンケート結果の要約

4.1 プログラム評価(5段階リカートスケールによる質問)

質問項目	M1 平均	M2 平均	全平均	SD
Q1 これまでのサブコースでの学びにどの程度満足していますか？	4.25	3.67	4.00	1.00
Q2 サブコース履修により、日本語や日本語教育を取り巻く状況への理解度は高まりましたか？	4.50	5.00	4.71	0.49
Q3 サブコースでは、将来日本語教員になる際に必要となる知識を体系的に学べていると	4.25	4.67	4.43	0.79

思いますか？				
Q4 サブコース履修は自身の専門分野の研究学習に良い影響を与えていますか？	3.00	3.67	3.29	0.76
Q5 サブコースの履修は大学院での学修の負担になっていますか？	3.50	4.00	3.71	1.11
Q6 参加したランチョンセミナーは有益でしたか？	4.25	4.33	4.29	0.95
Q7 大学院修了後、何らかの形で日本語教育に関わりたいというお気持ちはありますか？	3.00	2.33	2.71	1.38
Q8 登録日本語教員になるために必要な「応用試験」を(再)受験したいと思いますか？	4.00	3.67	3.86	1.68

4.2 日本語関係職への就職意向(7名中MIの4名が回答)

Q9 (日本語関係の就職を考えている場合) 将来ついてみたい日本語関係の職種

A 登録日本語教員として日本の日本語学校で日本語を教えたい | 1名

B (留学生)帰国後、母国の学校等で日本語を教えたい | 1名

C 役所やNPOなどの職員として、日本語教育をサポートする仕事をしたい | 1名

D 日本の大学で日本語を教えたい | 1名

4.3 記述式設問への回答

Q10 これまでのサブコース履修でよかったと思うことがあれば記入してください(回答任意)

・言語に対する理解が深まりました。

・自分の研究と直接的な関係はあまりなくて、学習する機会が無かった内容が多い。そのため、新しい学習がそれなりの難しさがあるものの、未来の活動との繋がりが明確なので、モチベーションも保ちやすいと思います。

Q11 これまでのサブコース履修で不満点や改善要望があれば記入してください

・必須科目は教員指定となっており、MIまでに履修する必要がある授業は履修しにくい状況があります。本専攻の授業や指導教員の授業と重なっていることがあり、履修できない場合があります。

・文化関連専攻の学生が、自分の所属する分野の「特殊科目」を履修しにくい状況があります。

・サブコースの授業に多くの時間を取られるため、自分の研究を進める時間が十分に確保できません。

4. 授業提供教員対象アンケート結果

回答者数 N=12

項目	平均	SD
Q1 サブコースへの科目提供について総合的に判断して満足していますか？	4.30	0.67
Q2 サブコースへの科目提供により日本語教育に関心のある学生の受講が増えたことは、先生の授業にプラスの影響を与えていますでしょうか？	4.40	0.70
Q3 サブコース運営委員会で作成した教員制度の解説ビデオ(2025年度科目提供者向け)などをご参考になりましたでしょうか？	4.00	1.25

Q4 今後解説ビデオを作成する場合、希望される内容は？(事前に用意した5種の内容から2つを選ぶ)

- ・「日本語教育の参照枠」(注:日本語教育における指導要領的文書)の内容について 6名
- ・養成課程でカバーすべき50項目の概要について 5名
- ・登録日本語教員制度の概要と本学の養成課程の概要 5名
- ・在留外国人の増加に伴う今後の日本語教育の展望について 3名

Q5 【回答任意】現行のサブコース制度へのご意見、改善へのご提案があればお聞かせください

- ・学生の修士論文執筆に直接役立つわけではないと思いますが、後期課程に進学せずに修士で修了することを目指す学生にとっては視野を広げる貴重な機会ともなるでしょうし、また学生自身は「資格」を得られる有益な機会として前向きに捉えているように思います。
- ・今後の日本社会やそれを取り巻く国際環境の趨勢からみて当サブコースの存在は増々重要性を増すと確信します。
- ・AIや自動翻訳機との付き合い方(上手に活用する一方、時にはそれらの機械を鞆の中にしまった上で昭和期と同じ、人間と紙のテキストだけの学習法を部分的にであれ取り入れる方法など)を考える必要があると思います。
- ・AIや自動翻訳機に頼りすぎた結果、文章を作るのは完璧に近いが、手にスマートフォンを持っていない状況ではまともに日本語を聞き取れない、喋れない、読めない外国人留学生が少なからず出現し始めました。

4.3 指導教員対象アンケート結果

回答者数 N=14 (※上記との重複回答者を含む)

回答	平均	SD
Q1 サブコースの履修は先生の指導学生の研究に何らかの形で役立っているとお感じでしょうか？	3.64	0.74
Q2 今後、ご指導の学生がサブコースの履修を希望された場合、推奨されますでしょうか？	4.29	0.73

5. サブコース運営委員による分析・自己評価

委員	分析・自己評価
石川	<p>【学生アンケート結果をふまえて】学生アンケート結果については2学年平均を見ると、Q2(理解度向上:4.71)・Q3(体系的学習:4.43)・Q6(セミナー:4.29)・Q1(全体満足度:4.00)の4項目で、5点中の平均値が4を超えており、全体として養成課程の授業に対して学生が一定の満足を示していることがわかる。とくに、Q3について高い評価が出ていることは、登録機関になる際に、関連科目の数を減らし、カリキュラムの精選と体系化を図ったことの効果と考えられる。Q6の評価も高く、こうしたイベントの継続実施が重要と思われる。一方、Q7-Q8に示されるように、応用試験の受験意欲や、修了後の日本語教師職への就職意欲については必ずしも十分とは言えない。Q8についてはM1のみ平均が4を超えているが、これはM1学生対象に応用試験対策のセミナーを実施した成果と考えられる。今後は、検討中の「アーリーインターンシップ」などの枠組みも念頭に置きつつ、日本語教師職への関心を養成課程の早い段階から養成していくことが重要であろう。</p> <p>【教員アンケート結果をふまえて】科目提供教員アンケートについては、Q1(満足度)とQ2(授業へのプラス影響)がともに4.4を超えており非常に高い評価が得られている。また、Q3(解説ビデオ)についても4を超える評価があり、今後とも、科目提供教員との連携を大切にしながら課程を継続していく必要があると考える。解説ビデオについては、今年度ニーズが高かったものを中心に準備していきたい。指導教員アンケートでは、Q1(学生の研究への有用な影響)への回答が3.64と4を下回っているが、これは、言語系以外を専門とする学生が多いためと思われる。実際、Q2(今後の学生への推奨)では、4.29という高い値が出ており、幅広い専門分野のゼミ指導教員からみて、日本語教師養成サブコース受講は(一定の学修負担が増えるという面はあるものの)、学生の視野とキャリアパスの可能性を広げる点で評価を得ていると結論できるだろう。日本語教員への就職の道を広げていくだけでなく、日本語教育の知見を兼ね備えたエキスパートとして様々な分野で活躍する人材を育てることもまた、サブコースの使命であると思われる。</p> <p>【総括】登録機関の一期生がM2になる次年度においては、応用試験受験の奨励を強</p>

	<p>化するほか、直接・間接に日本語教育とかかわる学生がさらに増えていくとを期待したい。また、それを可能にできるよう、カリキュラムやサポート体制のさらなる整備に努めたい。</p>
川上	<p>【学生アンケート結果をふまえて】</p> <p>Q1 から Q3 の教育の内容・質に関する質問への回答は平均が 4 を超えていることから、受講生には肯定的に評価されていることがわかった。一方で、Q4 の評価が低いのは、受講生の専門分野が幅広く、直接的に日本語教育・言語教育と関わらないものがあることが影響していることが考えられる。Q11 では、授業の履修のしにくさに言及されているが、今後はサブコース対象科目をほかの科目とあまり重ならない時間帯に開講するなど、工夫を考える必要がある。</p> <p>【教員アンケート結果をふまえて】</p> <p>科目提供、授業への影響など、肯定的に評価されていることがわかった。アンケートや解説ビデオは、科目提供教員の評価・ニーズを知ることや日本語教育に関する情報提供として有益だが、一方向での発信にとどまっているため、今後は相互に意見交換できる場や仕組みも必要だと思われる。</p> <p>【総括】</p> <p>コースとしては一定の内容・質を提供できていると思われる。今後は、コースの意義を確認しつつ、修了生のキャリア形成につなげていくことや、研究科の特性（多様な専門分野・留学生多）を活かしたコース運営をしていくことが求められる。</p>
齊藤	<p>【学生アンケート結果をふまえて】</p> <p>Q5 の M2 の平均値が4.0と高くなっているのは、私が担当する教育実習科目の履修が修士論文の執筆時期と重なることが影響していると考えられる。逆に言えば、これは修論執筆中でも教壇実習にも取り組んでいたことの表れとも言えるが、教壇実習の質自体は下げず、準備段階の授業を工夫することで負担の軽減ができないか、検討したい。また自由記述で本来の専門分野の科目が履修しにくくなっているという問題に対しては、関係教員の間で時間割編成を見直す必要があると感じた。</p> <p>【教員アンケート結果をふまえて】</p> <p>概ね肯定的な評価であることに安堵はするものの、参照枠の活用法や、AI の発展に伴い浮上した新たな課題などに、他の科目提供教員もさらなる情報や意見交換の機会を求めていることがうかがえた。FD 等によってこれらの課題への理解を深める機会の提供が必要だと思われる。</p> <p>【総括】</p> <p>本コースは副専攻相当の課程であり、学生それぞれの専門領域との関わりに差がある。そのことがアンケートで指摘された問題点にもつながっている。特に関わりが見えにくい専攻、また上でもふれた、履修しにくい科目がある専攻の学生などへの配慮や工夫が、本コースの継続には不可欠だと思われる。</p>

林	<p>【学生アンケート結果をふまえて】</p> <p>履修学生の評価は概ね高く、修業上の励みにもなっている様子が伺えた。MI での負担に感じる学生が多いことも読み取れる。博士前期課程1年次の授業負担が多いため、SC の修学に十分な時間が取れなくなったり、他の授業と重なったりすることが履修を難しくしている理由と考えられる。ランチョンセミナーのような授業外ミーティングがモチベーション維持のためにも大きな役割を果たしていることから、今後もこのような機会の実施を継続したい。</p> <p>【教員アンケート結果をふまえて】</p> <p>多くの指導教員が SC を学生の研究・教育上有益と考えていることがわかった。今後も SC の存在を積極的にアピールすることで、指導教員以外の教員にも本コースの有用性が伝わるようになると期待できる。担当教員からは「日本語教育の参照枠」への興味が高いことが意外であったが、日本語教育に限らず他の外国語教育にも有効と思われる項目、トピックについては、SC を通して伝えていく機会を設けることで、研究科全体の FD にもなると感じた。</p> <p>【総括】</p> <p>学生の負担軽減のためには、SC 関連授業の時間割上の工夫、履修マップなど授業提供上の工夫が一層必要になるのではないかと考えらえる。科目提供教員以外の研究科構成員についても、FD 等で情報を共有していくことにより、研究科全体の教育水準の引き上げにもつながると思われる。</p>
---	--